



戸田安士兄 葬儀説教

横山 良樹

戸田安士さんは祈りのひとでした。二二歳のときに半田教会で高橋秋蔵牧師から洗礼をうけてキリスト者になられ、昨年七月に、シルバーホーム「まきば」に転居されるまで七十年以上を半田教会の信徒として礼拝を大切に過ごされました。社会的な活動のたいへん多かった方であり、また大きな業績を残された方ですが、そのすべてが神の恵みに対する感謝の応答としてなされていたと、わたしは思っております。教会でも役員をはじめ、保健係をつとめるなど、その時々々の課題に応じて半田教会を整えてこられた方のお一人です。それにはお連れ合いの喜代子さんの存在も大きく、文字通りご夫妻は二人三脚で、ともに人生の旅路を、信仰を杖と頼んで歩んでこられた同志でした。安士さんも喜代子さんも一九三一年のお生まれです。安士さんの言葉を借りれば「一九三一年生まれは、生れ落ちてから十五歳まで、切れ目のない『戦時下の子』」でありました。満州事変の始まった一九三一年に生まれ、宣戦布告なき日中十五年戦争は四一年からは太平洋戦争

に拡大し、四五年の敗戦にいたります。この前後の体験は戸田さんの人格形成に甚大な影響を及ぼしました。八月十五日の玉音放送を戸田さんは勤労奉仕先の農場のラジオで聞いたそうです。学徒動員で働いていた中島飛行機山方工場がB29の爆撃で破壊されたため、今度は農場へ勤労奉仕に行かされていたのでした。この終戦の詔勅を聞いて戸田少年が思った最初のことは、負けるはずのない日本が負けたということ、負けそうになったら神風が吹くと信じていたので、あ、神風は吹かなかつたというのが第一印象だったそうです。それから後の出来事は「戦時下の子ども」であつた戸田さんにとって正に天地がひっくり返るような衝撃の連続でした。墨塗り教科書という言葉葉を、わたしも知識としては知っていました。が、実際にそれを体験した人の言葉は重みが違います。それまでは決して間違いないと信じて疑わなかつた国定教科書に、正しいことを教えてくれたはずの担任の先生が、みなさんに間違いを墨で消してもらいます。ここからここまでを消してください、と指示をされた。そして墨で塗りつぶされたゆく箇所は、今までもっとも重要だと言われた箇所だったので。この強烈な体験こそが戸田少年に、真理とはなにか、正義とはなにかを痛切に問わせる根源的な出来事となりました。そこから戸田少年は地域・場所・国を違えても変わらぬものこそ真理ではないか、また時代が変わっても変わらぬものこそ普遍的な真理ではないかと思案を重ね、キリスト

教信仰に導かれます。そのきつかけのひとつとなったのが学校の先生がすすめてくれた内村鑑三の「後世への最大遺物」という小冊子です。夏期セミナーの講演をまとめたこの小著は今でも簡単に読むことができます。キリスト者とは人格と人生と共同体を聖書に記された神の言によって形づくってゆく人だとわたしは考えていますが、内村は講演ではキリスト教色を前面に出すことはせず、むしろわたしたちが後世に残しうる最大の贈り物（遺物）はなにかを考察してゆきます。それは金か、しかしそれには金をためる力と使う力を持たねばなりません。では事業を起こすことか、しかしこれも金を使う力を持たねばなりません。また社会的地位も必要でしょう。さらに進んで思想や文学を残すことを検討し、最後に、誰もが残すことのできる最大遺物として「勇ましい高尚なる生涯」をあげるのです。それは「この世の中は決して悪魔が支配する世の中にあらずして、神が支配する世の中であると信じて」と、「失望の世の中にあらずして、希望の世の中であることを信ずること」、「悲嘆の世の中ではなくして、歓喜の世の中であるという考えをわれわれの生涯に実行して、その生涯を世の中への贈り物としてこの世を去るということ」、これを内村は「勇ましい高尚なる生涯」と呼んだのです。この本を通して戸田少年は聖書を知り、また自分の目標となる生き方を示されたと後年語っておられました。

戸田さんは祈りのひとでした。教会の役員

には礼拝の司会のつとめがあり、牧会祈祷とよばれる祈りがあるのですが、この祈りが実に深かった。祈りに深い、浅いがあるのかと思われる方もあるかもしれませんが。たとえば英語の本がわたしに手渡されたときです。わたしはそれを音読することはできませんが、それはアルファベットに従って発音しているにすぎず、そのニュアンスを伝えきるほどに内容を理解する力はわたしにはありません。最近ですとAIによる自動音声で読み上げられるニュースなどもそうかもしれません。字面は追える。言葉を発することも出来る。しかし、祈りの言葉に込められている本人の実存のかかった信仰は、こればかりは真似ようのないものです。わたしも戸田さんのお祈りからずいぶんと学ばせて頂きましたが、型を覚えることと、そこに真実が宿るということはまだ別です。戸田さんが祈る時、わたしはちはその祈りを聴いておられる神さまをイメージできた。主の前にひざまづいて祈っておられる信仰者の姿が浮かんできた。生きておられる神の前に心を注ぎます。そのような祈りをされる方でした。戸田さんの祈りを特徴づけることがふたつありました。ひとつは「憐れんでください」という祈りです。この言葉を心の底から祈っておられた。この言葉が絵空事ではなかった。それはやはり戦争中の体験があり、それを深く自分の罪、日本人の罪として内面化しておられたからだと思うのです。篠田潔先生とならぶわたしの恩師である長津栄牧師が、戦後の日本で教会が伸

びたのは、戦争をへて皆に罪の自覚があったからだと言われたことがあります。戦争という状況下では、父母を敬え、殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、隣人のものを欲するなという十戒のすべてが踏みにじられまう。タガが外れ、人間の底が抜ける。そういう戦争の時代を潜り抜けて生き延びはしたものの、罪の自覚に苦しむ人々に、主イエス・キリストの十字架による罪の赦しの福音を伝道者たちは伝えました。加えて戸田さんの場合は医師としての体験も後押ししたのではないかと考えます。最初の勤務地であった半田病院で戸田さんは伊勢湾台風を経験され、不眠不休で治療にあたられ、その悲惨で過酷な状況を野戦病院さながらであったと語られています。またアジア諸国に行つてさまざまに限界を感じられることも当然あった。人間には如何ともしがたい状況の中で失われてゆく命、格差により選別される命、そうした状況に医師として直面して無力さに打ちのめされ「あなたはどこにおられるのですか」「主よ、憐れんでください」と祈り、呻き、時には沈黙して聖霊のとりなしに委ねられる体験を幾度もされたと思うのです。戦時下の子どもは不条理な死を身近にして育ちます。死が国家により美化され、強制され、個人の命が鳥の羽よりも軽く扱われる。天皇のために死ぬことが美德だと学校で教えられ、疑わなかった。学徒動員によって爆撃や、戦時下ゆえその被害や死を遺族に知らせることも制限された東南海地震で死んでいった仲間たちを思うにつ

け、そこで自分の無力さ、いたらなさ、罪深さを思うにつけ、「主よ、わたしたちを憐れんでください」という祈りが篤くなつていったと思います。そしてそれはイザヤ書六章に、イザヤが預言者として神さまに召し出される出来事があるのですが、その時イザヤは、「わたしは汚れた唇の者、汚れた唇の民のなかに住む者」とみずからの罪を深く内面化し、民族の罪を自覚して告白し、そこから罪を赦されて派遣をされます。その姿が戸田さんと重なる。わたしは思うのです。そして戸田さんの祈りのもうひとつの特徴は「どうかわたしたちの国がふたたび過ちを繰り返しませんように」でした。これはここまでお話したことからお分かりのように、戸田さんの少年時代からの体験を思うにつけ、もう二度と、自分たちのような「戦時下の子ども」を作つてはならないという切実な執り成しの祈りであったと思います。祈りの深さは、みずからが罪人であるという自覚の深さでもありますが、同時にその罪が、信じられないことに神の御子、キリスト・イエスの十字架によって贖われているという恵みの出来事、この福音によって逆転・反転します。それが新約聖書でもっとも強く歌われている箇所ですが、本日お読みしたローマの信徒への手紙八章でここには「神の愛」という小見出しが新共同訳聖書でつけられています。あれほどの献身的な働きを生涯でなされたにもかかわらず、半田教会の祈祷会の感話に残された八十代を過ぎてからの戸田安土さんの回想には、主の御

委託に応えることの少なかつた後悔が語られることが少なくありませんでした。しかし、同時にみずから励ますように、いや、しかし、そのような罪深いわたしに神の赦しの愛が注がれている。わたしのような者が赦されてしまっている。ハレルヤ！この、驚くべき恵みよ、くすしき愛よ、とみずからを励ましておられました。「だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義としてくださるのは神なのです。だれがわたしたちを罪に定めることができましょう。死んだ方、否、むしろ復活された方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださいのです。どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです」。この御言葉を慰めとしておられました。

最後に、人間は生まれる時と死ぬ時は本当に受身で、自分一人で生まれてくることも死ぬこともできません。九三歳という命を与えられた安土さんもうぜん例外ではありませんでした。あしかけ四年近くに及んだコロナウィルスの影響も大きかったと思いますが、最後の二年ほど戸田さんが不調に苦しまれたことをわたしたちは知っています。わたくしも異ヶ丘のご自宅を訪問する機会が多かったですが、じつと黙って言葉を発することのない時もありました。しかし、そのような状態になつていくにつれ、神さまに頼り頼む祈りの姿勢は研ぎ澄まされてゆかれました。言葉

が増えるのではありません。この地上の肉体は軽くされていくのですが、その比重が神さまのほうに傾いてゆく。委ねていくのが分かるのです。訪問のあと、安土さんの祈った言葉をメモしたものを最後に紹介します。短いです。

神さま、悩みや苦しみのゆえに、あなたをないがしろにすることのないように守ってください。

神さまの前にみずからを注ぎだして生き抜かれた方の信仰が輝いています。土の器にもられた福音の宝とはこれだと、主の御名を崇めたことです。

お祈りいたします。

神さま

御許にまいりました戸田安土さんを覚え、送る時をあなたは備えてくださいました。主が兄弟の生涯を通して働き、導かれましたことを感謝いたします。死は、わたしたちを引き離しますが、あなたによって結ばれた縁は絶えることはありません。あなたは永遠の命をお持ちの方であり、主の愛は死よりも強いからです。どうか御国でわたしたちが再び繋ぎ合わされることを信じ、心安らかに別れを告げることを得させて下さい。

大切な宝をあなたにお返しした喜代子さんの上に、またお身内の方々の上に、あなたか

らの励ましと慰めが豊かにありますように。なにより安土さん、喜代子さんご夫妻を守つて来られたあなたからの信仰と希望と愛とが、つらなるひとりひとりに備えられて、平安のうちに歩むことが出来ますようにお導き下さい。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン



追悼 戸田安士兄

主に導かれて

―穂積教会の頃―

戸田 茂代子

一月十五日午後一時三十九分、安士は、召されて天へ旅立ちました。傍らに居て下さった主治医の太田先生が「讚美歌を歌いましょう。」と誘導して下さったので、薫がスマホに入れていた安士の愛唱讚美歌を、子供達と一緒に歌って送ることができました。目を瞑って安らかな顔を見ながら、私は「彼も一緒に歌っている。」と実感して歌いました。

安士が初めて半田教会を訪れたのは、一九五〇年のクリスマスでした。(名古屋大学医学部一年生) 当時は、穂積邸が半田教会で、庭の池や石燈廊が眺められる十畳と十二畳の二間続きのお座敷が、礼拝場でした。教会を訪れるようになった動機は、太平洋戦争敗戦体験と父親の病気でした。

一九四四年、中学(現半田高校)へ入学すると、一学期から全く授業はなく軍需工場(中島飛行機製作所)に学徒動員され、翌年には学徒義勇隊が結成されて、戦車攻撃訓練や背中に爆弾を背負って敵に飛び込む自爆訓練をさせられたそうです。

昭和二十年十二月八日敗戦。学業は復活したものの、毎日、教科書を墨で塗り潰す作業をさせられ、依って立つ足許が崩れるような体験から「不変の真理とは―。」と読書に

耽っていた時、国語の先生の脱線話から「後世への最大遺物(内村鑑三著)」を読み、偶然、兄の本棚にあった「神への思ひ(出隆緒)」を手にしたことで聖書に導かれました。本の冒頭にヨハネ福音書一章九節〜十一章が置かれていたが、文語訳で引用され「ヨハネ伝」と訳されていたので、聖書の一節らしいとは想像したが、ヨハネの伝記かと思つた。と昔話を話してくれた時の笑顔を思い出します。

大学入学後、すぐ聖書研究会に入ったのですが、父親が病気になる、余命いくばくもないと知らされたので、大学を辞めて父親の後を継ごうと決心し、夏休み明けは大学を休んでいた時、見ず知らずの外人宣教師ミセス・スマイス(金城学院)から呼び出され「戦後の日本にとってクリスチャン・ドクターは貴重な存在だから、ぜひ学業を続けなさい。」と熱心に諭され、私的奨学金まで提案され、そのご厚意に感動した父の一声で大学に復帰。友達に誘われて半田教会を訪れました。

一九五三年四月、高橋牧師から受洗。翌年から教会学校教師(当時は就職などで青年層減少)礼拝は午後二時からだったので、午前中、子供達(六十名余)とゆつくり楽しみ、昼食は穂積夫人のお世話になって日曜日、一日中教会で過ごしました。(穂積夫婦を「おじちゃん・おばちゃん」と呼んでいた。)

土曜日は、篠田牧師を迎えるまで週報印刷の奉仕。当時は謄写版印刷だったので、安士が鉄筆でガリ版書きし、二人で印刷しました。目の不自由なおじちゃんが、廊下の雑巾がけ

をされ、おばちゃんは、オルガンを弾いて奏楽の用意をしてみました。私達は、内村鑑三著の「後世への最大遺物」で入信しましたが、おじちゃんは、目の治療で東京滞在中に、内村鑑三の集会に出席し、その集会の司会者は、おばちゃんのお父様でした。お二人の現実感を持って話されるお話は、とても楽しく、励まされました。

私達夫婦は、穂積教会で出会い、穂積さん御夫婦のお勧めで結婚しました。全ては、主の導きの中に在ったと感謝です。

当時半田教会は、戦争中、信仰を守って来られた御年配の方が多く、一九五七年には横山晃一郎御夫婦(良樹牧師の御両親)も転入会され、お座敷教会の家庭的雰囲気の中で信仰生活の在り方を教えて頂きました。

先日、安士が、書き残したものの、「辞世メモ」と題したノートがありました。

「二〇二三年四月二三日聖日の朝」と目付されていました。「今自分の体調の衰えゆく日々実感して、次の聖句が、現在の心境に近いかと思います。」と前書きされて、メモテへの手紙二の四章六節後半から八節までが書かれ、特に八節後半「しかし、わたしだけでなく、主が来られるのをひたすら待ち望む人には、だれにでも授けてくださいます。」に点線がつけられています。この点線は、心弱い私への慰めであり、励ましである事に気付き、何度も読み返しています。

戸田先生を偲んで

岡本 正治

戸田先生は信仰者として、医師として、この地上での生活を終えられ、神の御元に帰られたことを知り、地上での最後のお別れが出来なかったこと申し訳なく思っております。

私共に長男が与えられた時、大変お世話になった事があるからです。長男は未熟児として生まれ、一ヶ月ほど病院の保育器で育てられたのですが、その間、他の赤子と胸の形が違っていたのです。退院後一年ほど生活した頃でしたが呼吸も早く、血色も悪く、私たち夫婦は心配をした生活していたのです。

その頃、戸田先生は、名大病院で医師をして働いていらつしやる事を知り、先生のお世話で小児科の医師を紹介してもらいました。その結果、心臓に欠陥が有ることが解り、このままでは、五歳までの命ではないかとの話を聞き、失望したのです。ただ手術による望みがある事を知らされたのです。その頃の心臓手術は新鮮血でなくてはならず教会員の方々にお世話になり、無事手術が行われました。

戸田先生と共に主なる神様を仰いでいたことが幸いであつた事を再び知ることができ感謝しています。

主の元で再びお会いすることを望みます

アーメン

לך הודות

ありがとうございます

榊原 有子

あの日、金曜日。戸田兄のお顔を見せて頂き「先生、半田病院が高台に、間もなく完成です」「行つてきますね」と語り掛け、新潟へと向かった。先々回の市長選、「半田病院を高台に」と訴える候補者の選対に私はいた。

候補者のお連れ合いの医師周一氏が戸田兄の教え子という。戸田兄が後援会会長を引き受けられたことをご本人からお聞きした時は、びつくりするやら心強いやら。理由は半田病院勤務時代でやり残したことが、病院を高台にということとお聞きした。選挙の手ごたえを皆が感じ始めた後半戦、かつて元県議を応援してきてくれた県知事街宣車が相手側の陣営で走り出した。開票の確定は24時少し前までもつれた。結果は負けた。隣の元県議とは日を越して間もなく、朝が早いというので別れた。その早朝、元県議の自分の作業場での事故死の訃報。翌日、県知事の一言で、半田病院の高台移転がひっくり返る形で決まった。戸田兄が「不思議なことがあるのですね、とにかく良かった」理由をお伝えすると、ねぎらいの言葉を頂いた。私は多くの半田教会員より兄との付き合いは短い。うれしい二週間だった。

イスラエルに行くと言った飛行機の中でのアナウンス「・・・トダ」幾度も「トダ」調べたら表題へブライ語、ありがとうございますですが、トダ。その通りの兄です。

医療の本質を示された背中

篠田 恵見

幼い頃より戸田先生には、両親の健康相談のついでにただでなく、一家のホームドクターとして家族ぐるみで大変お世話になりましたことを、家族を代表して感謝申し上げます。また個人的には、十八歳で看護職の道に進むことを決めた時に、とても喜んで下さり嬉しかったことを懐かしく思い出します。

先生は日本キリスト者医科連盟の名古屋部会主要メンバーとして長く奉仕をされ、特にAHIで開催されたエクステンジプログラムでは、海外からのクリスチャン医療従事者との交流を図る企画運営に重責を果たされました。大病院を定年退職された後も、「これからは被災地や海外への医療援助活動に向いていきたいと思っています」と目を輝かせながらお話しされた事があり、熱い情熱を持ち続けておられることに驚きと感動を覚えました。

教会では、礼拝後に教会員の相談に耳を傾けておられる姿を何度も目にすることがありました。私はそのような医師には戸田先生以外に出会ったことがなく、これぞ医療の本質である「相手の話を傾聴する」お手本でありました。御言葉が熱心に聴く信仰者であり、悩む人に真摯に向き合う医療者であった戸田先生を今も心から尊敬し、感謝するとともに、私も見做つていきたいとあらためて思っております。

戸田先生を偲んで

関 光徳

先生には、入退院を繰り返した父親と母親の相談に乗ってもらいました、教会でお顔を拝見するだけで気持ちがおだやかになりました。親子共々お世話になりました。その人柄は半田教会の皆様が感じておられると思います。しかし、そのお生まれの年一九三二年は満州事変が始まり、小一で日中戦争、小四で太平洋戦争、中一で学徒動員、中二で敗戦。その後医師の道を歩まれて、真理を求めてキリストと出会い、あの穏やかで優しい戸田先生です。みんなに頼られて、相談に乗ってくれて、私たちの誇りでもありました。「誇るの主ですよ。」と笑われていますね。今は天国で、私の父とお話されているのでしょうか？思いつくのは、先生とは百年誌の編集委員会でいろいろ教えていただき、完成した時に、とても喜んでいただいたことは今も覚えております。また、キリスト教功労者の顕彰式に東京で一緒に来た事、先生は謙遜してほんとは辞退したいとおっしゃっていましたね。戸田先生らしいです。また五、六年前までは毎年、葉書の印刷のお手伝いをしていましたが、もう宛名を書くのが大変だと言っておられたのを記憶しています。だんだんと体が衰えてくるのですね。でも、「まきば」に良樹牧師が訪問した時に体は弱っていましたが、お祈りはすごかったと言っておられました。異が丘伝道、奥田伝道と深くかかわって、伝道に生涯をささげた戸田先生。ありがとうございました。



第49回キリスト教功労者 2018年10月22日

恩師、心の礎として

山田 紀子

同じ異が丘の住人だったため、教会の保護者として多く助けていただいた。受洗後何もわからない娘を、結婚するまでの間、教会でも異が丘集会でも導いて下さり、教会から離れず今ある私の礎を築いてくださった。

夫が上司と折り合いが悪く、都立病院の人事に関わる上司だったため、名古屋へ引っ越したい旨、戸田先生に相談したところ、名古屋大学病院の医局への道を整えて下さり、常滑市民病院へ就職することができた。戸田先生のご尽力がなければ、東京都下の小笠原あたりに島流しにされる危機であった。私は実家が近くなると単純に喜んだ。愛知教会に転会し、教会に通えることも嬉しかった。夫が胃潰瘍になり、常滑の官舎に引っ越すことになった。母教会の半田教会に帰ってこられた。戸田先生ご夫妻と教会でお会いし、夫も礼拝に出席し、戸田先生と楽しく語らっているのを見るのが嬉しかった。陰になり日向になり、絶えず夫を気にかけてくださった。

その後、初めて私が役員になった時、戸田先生も役員としてご指導くださり、教会学校教師になった時も、戦前戦中のお話をしてくださり、半田教会の生き字引としてご尽力くださり、感謝に絶えない。言葉に言い尽くせないほどお世話になりながら、お別れしてしまつた。本当にありがとうございました。

修養会一二〇周年記念

修養会

鳥居 良基

一月に行われた修養会で半田教会のこれまでを振り返り、今後どうしてゆくべきかを話し合うために分団を行った。

私は2004年に洗礼を受けて昨年でちょうど受洗20年を迎えたが、半田教会の歴史はその5倍以上で、今に至るまでの先人たちの信仰の上に立てられている教会であることを実感した。半田教会のこれまでのことについて、知らないことの方が多く、話を聞く毎に諸先輩方の信仰への献身にただただ敬意の思いを抱くばかりである。

翻って自分のことを顧みると献身という意味では「自分に出来ることを精いっぱいやる」という域を出ていないように思う。少子高齢化が進んでいる日本の社会と同様、いやそれ以上に30代〜40代の人数が少ない今の教会において、その少ない層に属する自分に課された課題・使命は何かを見直す良い機会となった。

特に分団ではこの情報過多の時代に町に教会があることの意味について時間を割いて話をした。やはり教会に物理的に行くことで牧師や他の兄弟姉妹と語り合い、交流し、日曜日毎に自分を新たにされることがキリスト者としての信仰に不可欠なものと思わされた。これからも教会に通う身としてどのような献身が出来るのか、模索していきたい。

修養会に参加して

目次哲也

修養会に参加でき学びの機会を与えられ感謝です。

修養会では教会を支える役員のとつとめが主題でした。過去、役員を経験したが微力すぎてこれだよいかと思う時もあった。しかし神様により召され必要なものは備えていくださることを知り今後、役員に任じられても自然体で神様が用いてくださることを信じて任じられた役目を全うできればと思う。

役員会のとつとめの箇所では運営でなく教会形成が目的であり神様が表され、教会の礎をぶらさず変革を明らかにし、会員と共有するものであることを再確認した。また、宣教基本方針、宣教実施目標の箇所では、議決がなされる前の焦点、討議内容の共有が大切で、教会の働きとして形にすることが役員会に求められることを知ることができた。会員との共有がオーケストラの不協和音にならない為の役割なのかもしれない。

宣教実施方針・目標がプランに留まらず実行されるために自分自身に何が出来るかを問われていと思う。

今後、教会で良い音色をイエス様に聴いていただける楽団員でありたいと思う

『教会で形成された私の二十年間』

横山 結生

修養会で、半田教会二十年間の歴史を聞き、自分自身も教会に繋がって育てられた二〇年間だったと改めて思った。二十年前は小学校三年生で九歳の頃、毎週教会学校に通い、同年代の子どもたちと遊んでいたことを昨日のように思い出す。和室でお昼を食べ、役員会の時間帯、会堂で鬼ごっこやレゴブロック、カード遊びに興じる日曜日であった。あれから二十年、まさか自分が信仰告白をし、役員に選ばれているとは。

修養会の目的で語られた「半田教会を今後どのように形成していくのか、何を大切に守っていくのか」という言葉は、私には重いテーマだと正直感じていた。幼い頃からお世話になった信仰の先達も天に国籍を移される方が増え、時の流れを感じるとともに寂しさを覚える。年齢の比較的近い、かつての教会学校の仲間たちとは会う機会もなかなかなく、現状をみると今後教会の中核を担うであろう自分を想像し、重荷を感じないと言えば嘘になる。また教会で集う日が来てほしい。

何を大切に守っていくのか考えた際には、はたして両親が牧師でなかったら、私は神様と繋がっていただろうか、今の相談職に就いていただろうかと思う。この二十年間は私自身の形成に大きく繋がっており、神様や教会に集う兄弟姉妹の支えがあって今の自分がある。改めて毎週の礼拝の大切さに気づかされた修養会であった。これからも祈りの時間、神様の言葉に聴く礼拝を大切に守りたい。

私の好きな讃美歌

花木 和子

私の好きな讃美歌は、いくつもありますが、そのうちの3曲をお話させていただきます。

① 21-226 輝く日を仰ぐとき

(スエーデン民謡)

天地万物、宇宙をも創造なさった父なる神様は無限に広大で、厳しく、荒々しく、美しく、包容力に溢れ、すべての命あるものを生かし私たちも生かされています。その御業に触れる時、思わず神様を賛美します。愚かな私をあらまほしき存在に造り替えてくださり、主イエスの来臨に希望をもつて生きる者としてくださる。その喜びをスエーデンの人たちと高らかに歌いあげるので。以前、半田教会に招かれた声楽家夫妻が高らかに歌い上げるのを聴いてますます好きになりました。また、仲良しの木村ハルさんが声楽家の新美洋子さんに自分の告別式で歌って欲しいと頼み、果たされました。私も良樹先生の力強いバリトンで送って欲しいものです。

② 21-434 主よ、みもとに

有名なタイタニック号が沈む直前に乗り合わせた楽団員が捧げた讃美歌です。その劇的な物語と共に、5節の歌詞に初めて触れたとき体が震えるほど喜びに満たされました。私が地上の命から、天上の命へと移される時、

大きな翼が与えられ、主イエスの導きによって永遠の命に向かって、力強く、喜びに満たされて「主よ、みもとに近づかん」と、大声で力の限りに叫ぶように賛美しながら、一生懸命羽ばたいている姿を見たのです。私は死んだら、こうなるという信仰、ストーンと納得したのです。

③ 21-424 美しい大地は

この世の現実、悪と悲惨に満ち満ちています。強い者が欲に駆られ、雄たけびをあげながら、搾取に血道をあげるの、昔も今も変わりません。ウクライナやガザの惨劇、地球温暖化により海に沈みかけている太平洋の小さな島々の人々。そのことを思うと胸が潰れそうになります。私だけが平穩であればとは望みません。でも、何も力になれていません。しかし、主は現実をご存じです。弱い者の悲しみを分かってくださっています。この歌を捧げながら、美しい大地を守る者でありたいと願い、祈るのです。平和を切望する気持ちをお沸き立たせてくれます。そして深く慰められるのです。



◆ 編集後記 ◆

「五日一風十日一雨」五日ごとに風が吹き十日ごとに雨が降り作物が成長する。良い風や雨ばかりではない。時には苦しみを伴うこともあることを経験値から知っている。愛する兄弟を天に送った。宇宙を見上げれば、ビッグバン、惑星がぶつかり合って消滅し、その衝撃から新しい星が生まれる。悲しいこともすべてが、神様の御業を成し遂げるため、私も成長させ平和、平安を与えて下さることと地からも空からも教えられる。ご自分の事は寡黙な兄弟。姪代子姉、お辛い中のご執筆。よく伝わり安士兄の時間が内村鑑三だった等「知る」ことも許され、テモテへの手紙の一節、私共も励ましとなります。人生を変えられた人、命を助けられた人、後姿には、今からも教えて頂ける事ばかり。修養会を通して、これからの半田教会も希望しかないと確信。きちんと成長させていたたくものを天から頂いているから。私と讃美歌、なじみの讃美歌に色を与えられました。書くことを断られることもしばしば。神様からの恵みを分かち合いたい、この一心でお願いするばかりです。原稿を戴いた皆様に、心よりお礼を申し上げます。全てを吟味し良いものを大切にしながら。ローズンゲンの今年の御言葉。大切なことがいっぱいです。

榊原(有)